第３章　柳川市の掘割と観光資源

―掘割再生と観光川下り―

はじめに
1.　柳川市の概要
2.　柳川市の観光資源
3.　柳川の掘割
4.　掘割の再生と観光資源としての川下り
結びに代えて
参考文献

はじめに

「水辺のまちづくり」の事例として、本稿では福岡県柳川市をとりあげる。柳川市は、「水郷」「掘割」「川下り」のまちとして知られている。柳川市のある筑紫平野は水に恵まれない地であったにもかかわらず、人が住み着き、まちが生まれ、そして城下町として栄えた。柳川の地に人が暮らすためには、人々の生活を脅かす水を治めることが最も重要であり、掘割も重要な役割の１つを果たしている。人々はこの掘割とともに生きることで、自然の摂理の中に組み込まれていた。

しかし高度経済成長の波に飲まれて人々の生活環境が変わってくると、掘割の存在は忘れ去られ無残な姿になっていった。埋め立て目前の掘割が一人の人物を中心にして奇跡的に再生されると、掘割を地域の宝として大切にしょうという気持ちが市民に再び根付き始めた。掘割は農業用水の供給源として有用であると共に、川下りという観光資源として地域の活性化に役立っている。本稿では、柳川の掘割を取り上げ、水辺のまちづくりの現状について考えてみたい。

まず１節では柳川市の概要をとらえるために、地理的位置、人口、産業、歴史等について簡単にまとめる。２節では柳川市の観光資源を紹介するが、市のホームページのトップにもあるように、掘割を活用した川下りが柳川を代表する観光資源であることが示唆される。さらに３節では、この掘割の生成過程から埋め立ての危機に瀕する過程を、掘割の役割に触れながら歴史に沿って述べていく。また４節では、埋め立ての危機に瀕した掘割の再生とその観光資源としての魅力について考えてみたい。最後に、柳川市の観光振興計画に触れながら、市民による協働の重要性を指摘することで結びに代えたい。

1.　柳川市の概要

柳川市は、福岡県の南部、筑後平野の西南端に位置し、九州山地から有明海にそそぐ筑後川と矢部川に挟まれた扇形に似た形をした市である。市の大部分は干拓地であり、また標高が０m~ ６m しかないため、約６m という日本一の干満差をもつ有明海に広大な干潟が現れる。

2005年に、旧柳川市、旧大和町そして旧三橋町が合併して現在の柳川市が成立した。人口は

1960年の86,888人をピークに減少し続け、2005年の国勢調査では74,533人であり、また市のホームページ上で確認できるように2012（平成24）年12月末現在で70,985人となりさらに減少している[1]。

産業構造としては、2000年において第１次産業の割合が13.3%、第２次産業の割合が30.5%、そして第3次産業の割合が56.1% である。第1次産業は年々落ち込んでいるが、それでも全国（5.0%）や福岡県（3.7%）と比較すると、柳川市は第1次産業の割合が高く、基幹産業である。

農業産品としては、九州の穀倉地帯の一角を占めているため米や麦が中心であるが、ナス、レタス、イチゴ、トマト、アスパラガス、ブドウ、イチジクなど多種多様な作物が栽培されている。さらに水産業として、有明海の干潟を活用したノリの養殖が有名であり、日本一の高級ノリの産地として知られている。その他にも、クッゾコ（舌平目）、アサリ、タイラギ貝、ワタリガニなどの新鮮な海の幸があり、有明海は「宝の海」とよばれる[2]。

歴史的には、約2200年前の弥生時代中期から人が住み始め、有明海の湿地を開拓し、灌漑や排水のための水路を作り始めたとされている。しかし「城下町としての柳川」は、戦国時代に蒲池氏が柳川城を築いた頃から始まる。さらに本格的な城下町として完成するのは、1587年の立花宗茂の入城、そして立花氏に代わる1601年の田中良昌の入国と大規模な治水・利水工事によってである。後述するように、現在の柳川市を特色づける「掘割」は、この土地特有の水との闘いの中で、そして水との共生の中で整備されていったといえる[3]。

図１　柳川市ホームページ・トップ

2.　柳川市の観光資源

柳川市（以下、柳川）の観光の現状をみていこう。そこでまず、市のホームページのトップを開いてみよう（図１）。

これをみてわかるように、川下りの様子が写真で示されていることや、「観光情報」がこのページ上で目につきやすいところに配置されていることから、市の観光振興に対する姿勢を窺うことができる。また観光情報の項目には英語、漢字そしてハングルが見られるが、ここをクリックすると日本語のパンフレットとともに四ヶ国語のパンフレットが掲載されたページに移動する。

図２　柳川市観光協会ホームページ・トップ

1　福岡県の総人口は5,061,237人であり、柳川市は県内12番目の人口規模である。また柳川市から西鉄天神大牟田線で45分程度の福岡市の人口は1,434,355人（県1位）、15分程度の久留米市の人口は303,049人（県3位）、同じく15分程度の大牟田市の人口は123,346人（県5位）である（住民基本台帳2012年11月末現在　福岡県 HP より）。柳川市にとって大きな観光後背地が存在する。

2　有明海には独特な海の幸が他にもある。例えばムツゴロウ、ワラスボ、ワケノシンノス、メカジャなどがあり郷土料理店で味わうことができる。ムツゴロウ以外は、あまり馴染みのない名前であろう。ぜひ、一度食してみることを勧めたい。

3　柳川の歴史については市のホームページや種々のパンフレットも参考になるが、本稿では主として広松（2001b）を参考にしている。

ところで観光に関して市と密接な関係にある柳川市観光協会のバナーは、このページの最も右下に配置されているが、そこをクリックすると、柳川市観光協会のホームページのトップに移動する（図２）。

やはりここでも、川下りの様子が写真で載せられている。ただし、この写真は２月11日～４月３日の間に開催される柳川の春を告げる「柳川雛祭り；さげもんめぐり」の中で行われる「お雛様水上パレード」の様子である。お稚児さんを乗せた十数艘もの舟が、掘割をゆつら～っと進んでいる様子がわかる[4]。おそらくトップページのこの部分には、春夏秋冬に合わせて柳川で行われるさまざまなイベントの写真が飾られるのであろう。

現在、柳川の掘割を活用した観光イベントが複数行われている。具体的には、川下り（通年）、お雛様水上パレード（３月）、流し雛祭（３月）、沖端水天宮祭・舟舞台囃子（５月）、水郷柳川夏の水まつり「スイ！水！すい！」（８月）、白秋祭水上パレード（11月）、水落ち・お堀開き（２月）などがあげられる。また川下りコース沿いには花菖蒲園（５，６月）があり、冬場には「こたつ舟」も出るという。このように掘割は、柳川にとって、水郷独特の景観をつくり出す観光資源であるだけでなく、さまざまな祭りやイベントに活用される柳川を代表する観光資源であるといえよう。

もちろん掘割以外にも、柳川藩主立花家の別邸として建てられた御花と松濤園からなる名勝・立花氏庭園や詩聖・北原白秋生家・記念館、矢留大神宮、旧戸島家住宅、沖端漁港や、潮干狩り（３，４，５月）、桜まつり・流鏑馬（３，４月）、中山大藤まつり（４月）、中島祇園祭り（７月）、有明海花火フェスタ（８月）、三柱神社秋季大祭おにぎえ（10月）などが開催されている。また食文化として、先に触れた有明海の幸の他に「鰻の蒸籠蒸し」が有名であり、御花・松濤園や白秋生家がある川下りの終着地の付近には多くの鰻屋がある。

以上に列挙した観光資源の他にも、柳川には大切にしたいもの・残したいものとして選ばれた「柳川百選」があり、この中にさらに多くの観光資源が紹介されている。それらの内容については、柳川市や柳川市観光協会のホームページに譲ることとして、柳川を代表する観光資源である「掘割」についてもう少し詳しくみていこう[5]。

図３　北原白秋生家

図４　水路に面したなまこ壁の民家と汲み水場

3.　柳川の掘割

まず、柳川の掘割の形成過程からみてみよう。柳川のある筑紫平野は、九州山地から筑後川によって運び込まれた土砂や火山灰が有明海の激しい潮の干満活動によって泥になり、それが少しずつ堆積してできた低湿地である。弥生時代になると陸地化した

4　「ゆつら～っと」は、柳川地方の方言で「ゆっくりと」を意味する。
5　柳川市全域の大小さまざまな掘割の総延長は、現在930km にもおよぶ。

小高い場所に人が住むようになり、彼らはさらに居住地や耕作地を拓くために、低いところの土を高いところに盛り上げていった。こうして、地面を掘って作った水路、すなわち「掘割」が徐々に広がっていった。

戦国時代になると、この地方の豪族である蒲池氏が城を築き「まち」が形成され始めた。その後1587年には秀吉の九州出兵で功を立てた立花宗茂が入城したが関ヶ原の合戦を契機に改易され、替わってこの合戦で功を立てた田中吉政が入国して柳川を城下町として整備した。この田中氏が土木技術に長けていたため、有明海沿岸の海岸堤防や干拓事業、そして筑後川、矢部川、沖端川の大改修、山ノ井川の分水事業、用水路の開削、堰の築造などの治水・利水事業が行われた。さらに柳川城の城郭や城壕を整備することにより、筑後三十余万石の藩都として立派な城下町が形成されていった。まちの中を縦横にはしる堀には水が満々とたたえられ、現在もみられるような民家の表側が道路に面し、そして裏側が水路に面しているという柳川独特のまちの風景が形づくられた（図４）。

筑後川によってつくられた筑紫平野であるが、低湿地帯であるために有明海の満潮時には海水をかぶり、また大雨が降れば洪水になる。さらに日照りが続けば水の確保が難しくなるなど、柳川は水に恵まれない土地柄であった[6]。しかしこの城下町が発展していくためには水の安定供給が必要であり、先人たちの試行錯誤を経て、それを可能にする独特の水の制御システムが構築された[7]。なかでも掘割には、柳川にとって欠くことのできない三つの機能がある。

その第１は、遊水機能である。有明海が大潮の満潮を迎えたときには海面が陸地よりも高くなるため、このときに大雨が発生すると、市内に溜まった水を排出することができずに氾濫する。しかし、この雨水を掘割や水田に遊ばせておくことができるため、氾濫を防ぐことができる。水田が少ない市街地ではなおのこと、このような機能をもつ掘割の存在は重要である。また大雨時に大量の雨水が急速に下流に流れるのを防ぎ、水量を調整するための工夫（もたせ）が掘割のいたるところに施されている（図５）[8]。

図５　橋のもたせ（Ｖ字型）

第２は、貯水機能である。とくに農業において水は重要であり、灌漑期に日照りが続き水不足になった場合、掘割に水が蓄えられていればそれ利用して干害を防ぐことができる。過去においては、矢部川の取水をめぐって脚注6にあるような水争いが引き起こされた。今でも上流の水田で多くの水が取られてしまうと農業用水は不足するが、掘割に水を貯めておくことによってこの問題に対処することができるのである。

第３は、地盤沈下を防ぐ機能である。井戸を掘って農業用水として地下水をくみ上げると、ただでさえ低い地盤がさらに沈下してしまう。しかし掘割は水が一杯貯まっている間に地下水が涵養されるため、農業用水として取水されても、

6　1620年の田中家断絶の後、再び立花宗茂が柳川藩主として戻ったが、矢部川の貴重な水をめぐって隣藩の久留米藩との間で激しい水争いが行われた。

7　矢部川水系では水を制御する治水・利水施設が数千にもおよび、現在でも機能しているという。なお市の北側には筑後川があるが、筑後川は久留米まで有明海の潮が遡るため、用水として利用することができない。それゆえ、市の南部を走る矢部川から用水を取水せざるを得ない。

8　「もたせ」とは樋門や堰において流水量を調整する工夫であるが、図５の場合には橋桁をＶ字型にすることにより流水量を変えて流れを弱めている。

また地下水がしみ出てくる。これを繰り返し使うことで、地下水のくみ上げを最小限にして地盤沈下を防ぐ働きをしているのである。

このように重要な機能をもつ掘割は、昭和20年代まで、炊事・洗濯・飲料水などの生活用水の供給源であるだけでなく、泳いだり、魚を採ったりすることもできたほどのきれいな水を蓄えていた。そしてきれいな掘割を維持するために、町内会や隣近所の人たちが共同で清掃作業を行っていた。しかし1953年の西日本大水害を契機に上水道や簡易水道が整備されると生活用水を掘割に頼る必要がなくなった。その結果、それまでは自家処理を行ってから掘割に流していた排水をそのまま垂れ流すようになったため、掘割は瞬く間に汚濁してゴミ捨て場と化してしまった。

1961年からは城堀を使った観光川下りが始まったが、内堀コースはすでに使えず、外堀コースを使っていた[9]。柳川市役所は、1968年から3カ年計画で川下りの行われている城堀の幹線ルートの浚渫を行ったが、1974年頃には再び元の汚濁した状態に戻ってしまった。

しかし市は柳川の城堀が農業用水や観光資源として重要であると考えていたため、これを残す代わりに一部の幹線水路を都市下水路にして、その他の汚れた中小水路は埋め立てるという都市下水路計画を決定した。この計画を実行に移すために、1977年に環境課の中に都市下水路係が設置され、そこの担当者となったのが広松伝であった。

広松は、「柳川ははじめに町があり、その町の人の暮らしのために掘割ができたのではなく、歴史的な背景をもつ掘割がまずあり、この掘割によって町が養われてきたのだ」と考え、「掘割を埋めるということはこの地の歴史を断つことに等しく、掘割の機能を考えるならば掘割は決して埋めてはいけないものであり、掘割がなくなれば柳川は亡びてしまう」という信念をもっていた。広松という一人の人物が登場することにより柳川の掘割は再生し、柳川を代表する観光資源として掘割を活用する現在に至るのである。

4. 掘割の再生と観光資源としての川下り

広松は、市長に直訴までして都市下水路計画をいったん棚上げさせ、掘割再生のための河川浄化計画を立案した。この計画には以下の三つの柱が据えられたが、そこには1968年に行政が主体となって行った浚渫作業失敗の反省から、住民参加の必要性が強く求められている。

1. 計画は住民の理解と協力を取り付け、住民参加で浄化する
2. 汚水の流入をできるだけ抑止する
3. 維持管理システムを作り、住民参加で維持管理をする

広松は、住民の共感を得るために住民懇談会を開き、自分の掘割にかける思いを熱く語ることによって、住民の掘割再生に向けた理解と協力を引き出していった。その結果、浚渫作業が進むにつれて多くの住民が浚渫作業に参加するようになり、５年計画であった約27km の浚渫が1年半で目処がつき、さらに約10km 伸ばしたにもかかわらず３年２ヶ月で浚渫を終えた。

掘割に水が流れ出したことで柳川の水郷としての価値が再び高まり、1979年には国土省の伝統的文化都市環境保存地区整備事業の指定を受け、水辺の散歩道の整備が行われた。その後も

9　川下りは自体は、1952年の柳川市制施行記念事業の一つとして始まった。1955年には柳川商工会議所の有志が料金をとって川下りを運行したが、1961年には民間企業が30隻のどんこ船を使って本格的な観光川下りを始めた。現在は5社が運行している。

遊歩道の整備は、都市計画道路事業（歩行者専用道路）、ふるさとの川モデル事業、そしてまちづくり交付事業へと引き継がれ、2011年までに事業費約15億円、事業量3,630m に及ぶ整備が行われた。

現在、掘割については、2009年に策定された『掘割を生かしたまちづくり行動計画』（５カ年計画）にもとづき、国、県、市そして市民が役割分担をしながら様々な施策を実施している[10]。この行動計画には、2012年度の目標の一つとして「年間の掘割清掃参加者延べ数27,000人以上を目指す（2006年度は約18,000人）」とあり、広松が求めた住民参加の浄化活動の精神がこの計画の中にも込められている。

再生なった掘割を活用した川下りは柳川の最も重要な観光資源であるが、この現状をみるために、柳川市観光課の資料から観光入込客数と川下り利用者数をグラフ化してみよう（図６）。

図６　観光入込客数と川下り利用者数

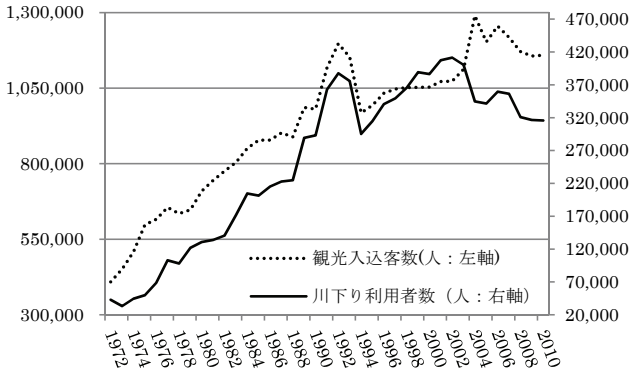

図６をみると、観光入込客数と川下り利用者数はほぼ右上がり傾向であり、どちらの人数もこの約40年の間に増加してきたことがわかる。途中の1988年から1994年にかけての大きな山は、バブル景気とその後のバブル崩壊の影響であろう。

ところで、2004年に観光入込客数が大きく増加しているのに対して、川下り利用者数は逆に減少している。その後の両者の動きはほぼ平行しているが､2004年だけが異なる動きを示している。ただし2005年以降をみるのならば、両者の動きは景気回復の兆しがなかなかみえない日本経済の状況を反映したものになっている。

2004年を別とすれば、川下り利用者数と観光入込客数はほぼ平行して動いており、柳川を訪れる観光客の多くが川下りを楽しんでいることが読み取れる。川下りが観光目的であることを考えれば、川下りの集客力を高めることによって観光入込客数が増えるという因果関係を考えることもできなくはないであろう。

次節でみる2009年に策定された『柳川市観光振興計画』の中には、「柳川市観光の課題」の

図７　掘割を進むどんこ舟 (1)

図８　掘割を進むどんこ舟 (2)

10　この実行計画は、2007年に施行された「柳川市掘割を守り育てる条例」にもとづいて策定されている。

一つとして川下りの市内周遊ルートの確立や川下りの季節・時間制約の克服が上げられている。川下りという柳川ブランドを確立するためにも、川下りの楽しみ方の創出が必要とされている。どんこ舟に揺られながら船頭さんの楽しい話を聞き、川面から岸を眺めるのは非日常的であるがゆえの風情がある。市民の中から新しい楽しいアイディアが生まれることを期待したい（図７・図８）[11]。

結びに代えて

柳川市では、2009年３月に『柳川市観光振興計画』を策定した。本計画は、最上位計画である『第1次柳川市総合計画』の分野別計画と位置づけられ、国や福岡県さらに九州地域における観光施策と連関性をもっている。計画期間は2009年度から2018年度までの10年間の長期計画であるが、そのうち2010年度までの２年間を短期計画とし、また2013年度までの５年間を中期計画としている。短期計画と中期計画の年度末には見直しを行うことになっているので、現在その作業が行われている。

『柳川市観光振興計画』では、国の『観光立国推進基本計画』と同様に施策に数値目標が設定されている。具体的には、以下である。

(1) 入込み観光客延べ人数：2008年　1,112,886人

短期計画が終了する2010年までに115万人、そして中期計画が終了する2013年までに130万人、さらに長期計画が終了する2018年までに150万人にすることを目標にする。

(2) 外国人観光客数延べ人数：2008年　82,372人

短期計画が終了する2010年までに10万人、そして中期計画が終了する2013年までに14万人、さらに長期計画が終了する2018年までに18万人にすることを目標にする。

(3) 観光消費額：2008年　46億円（1人当たり4,144円）

短期計画が終了する2010年までに約49億円（同4,300円）、そして中期計画が終了する2013年までに約58.5億円（同4,500円）、さらに長期計画が終了する2018年までに約75億円（同5,000円）にすることを目標にする。

(4) 満足度：2008年　次頁表参照

観光客の満足度を次のようにアップさせる。

11　例えば岡本（2010）では、住民が生活レベルでの掘割の有用性を再認識する必要性を強調しており、具体的には舟による郵便物の配達や公共輸送手段としての活用があげられている。また大野（2004）においても、柳川の掘割を他の地域の水辺空間と比較しながら評価や提言を行っている。

	2008年調査 (%)	目標値 (%)		
		2010年	2013年	2018年
食事	59.2	60.0	65.0	70.0
土産品	37.2	40.0	45.0	50.0
観光施設	42.6	45.0	50.0	55.0
観光整備	36.4	40.0	45.0	50.0
市内移動	37.3	40.0	45.0	50.0
ホスピタリティ	54.2	55.0	60.0	65.0
観光情報	35.0	40.0	45.0	50.0
旅行全体	62.1	65.0	70.0	80.0

『柳川市観光振興計画』（2009）を若干修正して作成

ここでは、入込み観光客延べ人数を取り上げてみよう。前節の図６でみたように、柳川市の観光入込客数は2004年の129万人をピークに減り始め、2010年には約1割減の116万になっている。この2010年の116万人は、短期計画の2010年の目標値115万人を上回っているので計画通りに進んでいるようにみえる[12]。しかし、その3年後の2013年の130万を達成するには13% 増が必要であり、このままの状況では難しいであろう。2005年以降の入込客数の低下の理由を景気低迷という経済環境の悪化に求めたが、それでは受身の姿勢であり、逆境を跳ね返す積極的な姿勢が求められる。

実際、この振興計画における「柳川ブランドの構築」項目のプロジェクトの中には川下り関係として、船頭体験や夜の川下りの充実、さらに新規の川下りコースの設定が上げられている。また「食の魅力づくり」項目では川下りの風景を楽しみながら食事が上げられ、さらに「魅力的な地域づくり」項目では川下りの定期船の運航、川下りの乗り場の一本化そして川下りコース沿いを含む全市的な良好な景観形成が上げられている。また前出の『掘割を生かしたまちづくり行動計画』における「掘割を守り育てる実践行動」の中では、掘割は自分たちのもの、そして地域のものとして共同管理してきた歴史があり、今後も水に対する意識啓発を高めながら市民一人ひとりが自分たちの問題として意識し、協働して取り組む必要性を強調している。

この市民の協働について田村（2005）では、まず市民を住民と区別して自分たちの住む場所を自分たちのものであると意識し積極的にかかわろうとする者だとし、その上で市民が互いに必要な時には協働するという気持ちをもつことが重要であると述べている。またそうであれば、景観が「まち」全体のものだという意識を市民がもつことによって協働が生まれ美しい景観が維持されていくという。さらに、美しい個性的な景観を作るためには市民間の調整役を果たす景観行政が必要になるが、これは長期的な視点をもつものでなければならないことも強調している。柳川の市民そして行政には、この協働の精神がすでに根付いているように思われる。観光振興計画が成果のあるものになるように、掘割をめぐる景観の維持に対してより積極的な行動が求められるであろう。

敷田他（2009）では、現在は地域の関係者が主体的に観光に関わることが重要であるとし、

12　柳川市観光振興計画では本文にあるように2008年の観光入込客数を111万人としているが、図6における2008年のデータは117万人である。計画では2010年に3.6% 増の115万人を求めているが、2008年を117万人とすればその3.6% 増は121万人であり、計画通りには進んでいないことがわかる。

そこから当該地域の優れた価値がすぐにイメージできるブランドを築くことの必要性と、そのマーケティングが重要であると述べている。また古川（2011）においても、社会的に共有された記憶としてのブランドを確立することが重要であり、さらにそれを継続する仕組みを構築することも重要であると指摘している。そして仮にそこに卓越した一人の人物がいなくても、地域が元気になるという同じ目的を共有する多くの人々の協働が、ときに予想外の大きな成果を生み出すことができると述べている。

柳川の掘割の水質は決して元に戻ったわけではない。しかし水は自浄効果によってきれいになる力を持っている。行動計画の副題にあるように、いつの日か再び「ホタルの飛び交う水郷柳川」になることを期待してやまない。なお本稿を作成するに当たり、資料の提供と貴重な話を頂いた柳川市役所観光課の方々に、心より感謝を申し上げたい。またこのような機会を与えてくださった、愛知大学経営総合科学研究所にも謝意を述べたい。

参考文献：

大野慶子 (2004)『都市水辺空間の再生』ミネルバ書房
岡本哲志 (2010)『港町のかたちーその形成と変容ー』法政大学出版局
敷田麻美・内田純一・森重昌之 (2009)『観光の地域ブランディングー交流によるまちづくりのしくみー』学芸出版社
田村明 (2005)『まちづくりと景観』岩波新書
広松伝・森俊介・宮本智恵子・宇根豊・渋谷忠男 (1990)『地域が動き出すときーまちづくり五つの原点ー』農村漁村文化協会
広松伝 (2001)『よみがえれ！“宝の海”有明海ー問題の解決策の核心と提言ー』藤原書店
古川一郎編（2011）『地域活性化のマーケティング』有斐閣

参考 URL：

柳川市ホームページ　http://www.city.yanagawa.fukuoka.jp/
柳川市観光協会ホームページ　http://www.yanagawa-net.com/